令和 6 年 12 月 24 日（月）
2 学期終業式訓話

一枚になれ

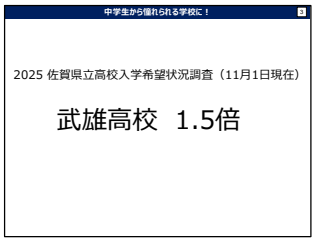
校長　下村　昌弘

○　全校の皆さんおはようございます。今年は秋が短くて一気に寒くなった気がします。体調はいかがでしょうか。

○　2 学期の締めくくりに当たり私からお話させていただきたいと思います。メモの準備はいいでしょうか。

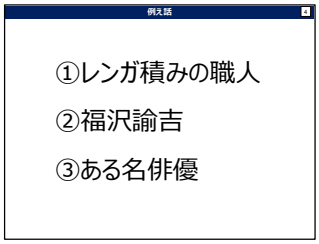
○　11 月 15 日の TAKE OFF press で砂山のパラドクスの話を書きました。どこまでが砂粒で、どこからが砂山といえるのかという話です。覚えている人もいるのではないでしょうか。あれはなかなかいい話ではなかったかと自分では思っているのですが、そうでもないですかね。今日もいい話になればと思っていますのでよろしくお願いします。

○　さて、長かった 2 学期も振り返ってみるとあっという間でした。勉強を中心とした高校生活ではありますが、いろいろな学校行事や部活動の大会、コンクール、その他自主的な取組が皆さんの糧になったと思います。



○　高校入試の倍率も 1.5 倍。ニュース見ました？　皆さんのおかげでどんどん武雄高校は中学生からあこがれられる高校になってきています。ありがとう。これからもそれに恥じない学校にしてほしいと思います。

○　しかし、ちょっと気になることもあります。細かいことですが、時々昼休みに聞こえる奇声。どこでだれが発しているのでしょう。ちょっと品がないな、野蛮だなと感じます。また、ちょっと視野の狭い判断をしてしまい、トラブルを起こす人がいます。

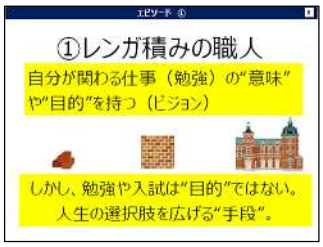


○　そこで今日は皆さんに落ち着いて考え、一年間を締めくくってもらえるよう、この 3 つのたとえ話をとおして今年最後のメッセージを送ります。ジブンゴトとして正面から受け止めてくれると嬉しいです。

○　まず一つ目はレンガ積みの話です。今日は「砂」ではなく「レンガ」。3 人のレンガ職人がいました。

○　まず一人目に「何をしているのですか」と尋ねると「ご覧のようにレンガを積んでいます」と答えました。2 人目に同じ質問をすると「レンガを積んで壁を作っています」と答えました。そして 3 人目にも同じ質問をすると「レンガを積んで大聖堂を造っています。子どもが大きくなった時、お父さんがこの教会のレンガを積んだんだと伝えることを楽しみに毎日レンガを積んでいます」と答えたそうです。

○　一人目の職人はただただ「レンガを積め」と言われて積んでいますが、二人目と三人目の職人は積んだレンガがなんになるか完成の先を思い描きながらレンガを積んでいます。



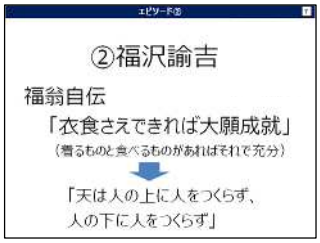
○　これら三人のレンガ積みの人生の質はまるで違います。人として大切な使命は自分が関わる仕事の「意味」や「目的」をしっかり持つことです。

○　だから今日の話でまず皆さんに伝えたいことは「今やっている“レンガ積み”の目的は何なのかを意識することで仕事の質、勉強の質、人生の質が変わる」ということです。まず、このことに「なるほど」と思っていただきたい。

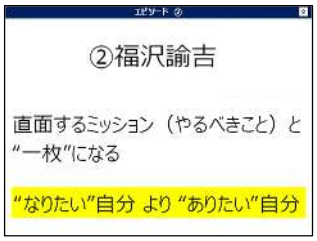
○　私もこれまで中学生に武雄高校の話をさせてもらう時に「高校入試は『目的』ではなく自分の人生を広げる『手段』なんですよ。勉強の先にもっと大きな人生の『目標』や『目的』を持ちましょう。『手段』と『目的』が逆転してないですか？」という話をしています。

○　皆さんは今、勉強は何のためにやっていますか？　人生の目標がありますか？　「いい点を取るため」「大学に合格するため」に留まっていませんか？ その先にある大きな世界を意識することで人生の質が変わるものです。

○　いかがですか。これはこれとして皆さんにまず受け止めてもらいたいことです。
○　でも、正直言って今取り組んでいるレンガ積みが将来何になるかなんてどれくらいの人が分かっているのでしょう。リーダーとか責任者ならまだしも一職人がそこまで考えていますかね。考えられるなら考えた方が断然いいわけですが、自分にはなんかそこまでイメージするのは無理という人もいるのではないでしょうか。



○　そこで二つ目は福沢諭吉の話です。幕末から明治期の啓蒙思想家、教育者、慶應義塾の創設者です。
○　福沢諭吉も決して最初から明治の先覚者として新文明の指導者になろうと大理想を抱いていたわけではありません。自叙伝である『福翁自伝』にも書いてありますが「衣食さえできれば大願成就」だと思っていたのです。
○　自分の境遇に応じて必要な努力を積んでいるうちに、それがいろいろな著書となり、活動となってついに「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」というあの思想につながり、真っ向から封建思想と戦って結果として明治の新文明の基礎を築き上げることになったのです。
○　つまり、ここで私が言いたいのは、若い時代に壮大な理想を描くことは決して悪いことではありませんが、むしろあった方がいいに決まっている。しかしそれよりも大切なことは自分の現在の境遇に応じて、現に直面しているミッション・やるべきことと“一枚になる”そういう修養を積むことだと思うのです。
○　人生はなかなか思いどおりにはいきません。こんなことを言うと元も子もありませんが、今立てている目標、将来の夢が達成できる人っていったいどれくらいいるのでしょうか。
○　一つのサンプルとして自分のことを言うと、私も高校時代、仕事の夢、希望を持っていました。でもそれは漠然としたものでした。あの頃自分が思い描いていた大人に今なれているのかどうか、あの頃にイメージしていた仕事が今までできてきたのかどうか、、、大変心もとない。はっきり言って全然違います。
○　しかし、ほとんどの大人がそうだと思います。人生のいろいろな場面で遭遇した事態、与えられたミッション、かかわってくれた人が自分の想定をはるかに超えている。つまり今の自分はかつて思い描いていた将来とは全く違うものになったわけです。
○　人生とはもともとそういうものだと思います。与えられたミッションに真剣に取り組む。そうすることで将来が出来上がっていくものなのです。



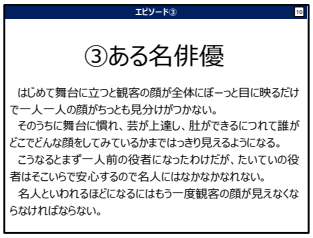
○　だから私は思うのです。「なりたい」自分を思い描くのではなく、自分はどう「ありたい」のかを考えるほうが現実的なのではないか。「なりたい」自分ではなく「ありたい」自分、「あるべき」自分を考えるほうがよほど大切だと思うわけです。

○　半世紀前の、時代が今より緩やかに流れていた頃であれば、先の変化が想定しやすい、一定の右肩上がりの時代であれば、「なりたい自分」を設定し、逆算的にどんなステップをたどればいいか比較的容易に考えることができました。

○　しかし今は VUCA の時代。

○　V、U、C、A でブーカ、予測困難で複雑な時代です。明確なビジョンが持ちにくい時代なのです。

○　こうした時代だからこそ、今自分はどうあるべきか、目の前にある現実的な課題やミッションに正面から向き合って、自分と今突き付けられている課題・ミッションとが“一枚になる”ことが大切だと思うのです。



○　では最後に３つめ。ある名俳優のことばを紹介します。

○　「はじめて舞台に立つと観客の顔が全体にぼーっと目に映るだけで一人一人の顔がちっとも見分けがつかない。そのうちに舞台に慣れ、芸が上達し、肚ができるにつれて誰がどこでどんな顔をしてみているかまではっきり見えるようになる。こうなるとまず一人前の役者になったわけだが、たいていの役者はそこいらで安心するので名人にはなかなかなれない。名人といわれるほどになるにはもう一度観客の顔が見えなくならなければならない」

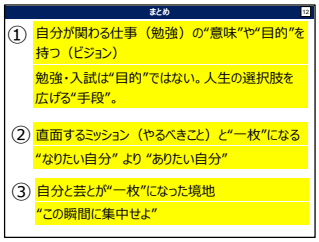
○　これは意味が深い言葉です。

○　初めての舞台で観客の顔が見えないのは芸が未熟なためでこれはお話にならない。しかしもう一度見えなくなるというのはどういう意味でしょうか。

○　これは、観客の目を超越して自分の芸に魂を打ち込んでいる境地、つまり自分と芸とが“一枚になった”境地だと思います。名人はそこに達しなければならないというのがこの言葉の意味です。

○　仕事や勉強も同じではないでしょうか。人の目、周囲の様子が気になるようでは本物ではありません。目の前のことに魂が吸い込まれてしゃにむに取り組むところにいい仕事、いい勉強ができるのです。

○　そこで３つめ。「この瞬間に集中せよ」「一枚になれ」。この言葉を令和６年の結びとして皆さんに送りたいと思います。



○　冬は集中できる絶好の季節です。これらの言葉を胸に刻んで年末年始を迎えてください。元気に１月８日に会いましょう。頑張ってください。ではよいお年を。